

## ファシリテーション以前：すくいとる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富永, 良史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/6879">http://hdl.handle.net/10098/6879</a>

## ファシリテーション以前

～すくいとる～

富永良史

例えば金魚すくい。

薄い紙を破ることなく次々とすくいとる人がいる。  
最初のひとすくいで破ってしまう人がいる。  
違いはどこから生まれるのか。

いかにすくいとるかを教わり、真似したところで  
よく似たふるまいはできても、同じ成果は出せない。

ひとりひとりの中に、固有の感覚がある。  
さまざまな行為を司る感覚がある。  
身体や時間や他者に対する感覚がある。

対話を喚起するファシリテーションという行為の背後にもある。

### 1. すくいとるための言葉を探す／準備

ファシリテーターを志した6年前。  
私は数ヶ月の間、ファシリテーションを解説した書籍の熱心な読者だった。  
細部にこだわり繰り返し読み、その考え方や技術を身につけようとした。

対話の場にファシリテーターとして立つことを重ねるにつれて  
そのような書籍が説く論理を心身が受けつけなくなっていった。  
論理を語る自分の言葉が残す虚ろな余韻を羞恥した。

誤ったことが書かれているとは感じなかった。  
書かれていることが自分の行為を殺していると感じた。

対話の場に身を投げ出して羽ばたくように語りあうことを邪魔している気がした。

正しく思えること、理解できて納得できることが書かれている。  
その理解と納得が場を感じ取る感覚にフタをしているように感じた。

他者に行為の論理的根拠や具体的方法を説くことは、どれくらい有効なのだろう。  
自己と他者の間でとりかわされるコミュニケーション行為においては  
あらゆる行為、場面が固有で一回限りで、個人的な意味を持つ。  
そこでのふるまい方を論理で説明したり学んだりすることはどこまで可能なのだろう。

深い対話はいつも、書籍の論理の外からやってきた。  
想定外のことが起き、対処法が書籍の知識の中に見出されないときに。  
出来事と内面が呼応し思いがけない問いかけが生まれ、思いがけない展開をもたらした。



対話。  
思いを受けとめあい、違いを感じ、新たな思いを紡ぐこと。  
何かを捨てて何かを選びとるのではなく、何かを生み出すこと。  
いそがず、てらわず、遠く広く深くみつめて感じ考える時間。

そんな対話は何が可能にするのか。

ひとつの結論。  
個人的な結論。  
今のところの結論めいたもの。

ある種の知識は対話の時を貧しくする。

知識。  
あらかじめ持つ現実に対する目線。  
現実に向きあうための準備。

準備は予断を生み出す。  
何かを予断することは、何かを見失うことにつながる。  
何もかもを見ることはできない。いつも何かを見ていて、何かを見ていない。

対話はいつも、今ここで生まれ起きる。  
予断はいつも、今ここを見失う道につながっている。

有効な準備があるとすれば、それはおそらく  
自分が傷つき失敗することを予防するためのものではなく  
いやおうなく訪れる傷つき失敗する瞬間から何ごとかを生み出すためのものだろう。

準備。

物事をする前に、あらかじめ必要なものをそろえたり態勢を整えたりすること。

対話を喚起するファシリテーターにとって必要なもの、態勢とは。

対話の場と向きあう前に、何を知っていればいいのか。何を考えていればいいのか。

それはおそらく、緻密な計画ではない。進行表や原稿ではない。

少なくともこれらは必要なもののリストの上位には、あってはならない。

これらの準備は、対話の時を貧しくする。

話し方や聴き方の技術があるに越したことはないが

それのみに頼るなら、やはり対話の時は貧しくなるだろう。

私はそう思う。

対話の時は限られ無限ではない。

時間を細かく区切り、いつ何をすべきかを段取りせよと囁く誘惑にはあらがいがたい。

話すべきことが整理されていなかったら、無駄に時間を使うのではないかと不安になる。

しかし、はたして時間とは、あらかじめ区切れるものだろうか。

話すべきこととは、あらかじめ整理できるものだろうか。

時間は均質ではない。

時計で量れるのは、時間の性質の一部にすぎない。

ひとりで過ごす時間であれ、誰かと過ごす時間であれ

そこには意味があり、流れがあり、もしかしたら肌触りがある。

それは、あらかじめわかることではないだろう。

話すべきことには、伝えるべき相手がある。

相手がない話は独り言にすぎない。

伝えるべき相手が誰か本当に定まるのは、伝えようとするまさにその瞬間だ。

名前や所属や年齢がわかっていることと、伝える相手が誰かがわかっていることは、異なる。

自己も他者もその内実は、時の流れの中で常にうつろう。

うつろいゆく自己がうつろいゆく他者と向きあったその時にこそ、話すべきことが定まる。

あらかじめ定めれば、うつろいゆく自己も他者も見失い、言葉は虚ろに響くだろう。

今ここにある時間と自己と他者は、あらかじめ想定するそれよりも、ずっと多様で複雑だ。

絶えることなく意味が生まれ、関わりが育まれる。

予断を持って今ここに臨むとき、その絶えざる営みは見失われ、損なわれる。



生まれ育まれるものと向きあおうとした時間を想起しながら  
ファシリテーションという言葉で表される考え方や行為よりも  
もっと奥底にある感覚を言葉としてすくいとってみたい。

言葉をあやつる能力の稚拙さは、下手な金魚すくいのごとく  
感覚をすくいとる前に破れてしまうかもしれない。  
すくいとった気になって、違う何かをすくっていることに気づかないかもしれない。

しかし、すくいとろうと試みる瞬間の真摯さは、私に何かをもたらすかもしれない。  
私の試みを眺める人に、自分だけの何かをすくいとろうという気持ちを生起させるかもしれない。

ここまでの考えが、この文章を書くにあたっての私にとっての準備だ。  
行為を語る言葉、行為の背後にある感覚をすくいとる言葉を書きながら探してきた。

ふさわしい準備ができたのだろうか。これからの語りは貧しくはならないだろうか。  
ささやかな期待と、ぬぐいがたい羞恥と不安とともに試みを開始する。

## 2. 流れる時間を感じなおす／想起と省察

ビデオに録画された光景を観ながら想起を開始する。

私は、私とその一部だった対話の場を観る。  
ファシリテーターとしてふるまっている私と、対話の参加者を観る。  
そこに流れる時間を感じなおす。

以下に、ビデオを見ながら想起した私とその一部だった対話の場を描く。  
起きていたであろうこと、私の目に映っていたであろうこと、耳に聞こえていたであろうこと  
心が感じ取っていたであろうこと、そして私のふるまいを描く。

想起しながら浮かび上がる私のファシリテーション以前の感覚をすくいとろうと試みる。  
その感覚についての語りは省察として文中にアルファベットで項立てして示される。



2012年3月3日（土）15:30～17:40 福井大学にて  
ラウンドテーブル福井ZoneA sessionIII 「Careと専門職の学び」  
全国から集う参加者25名による語りあい、フォーラム。

5人ずつのグループが5つ。

事例の報告が県外からと県内から1件ずつ。

あらかじめ、グループと全体を往復する対話の時間を大まかにデザインしていた。

第1の報告を30分聴き、15分のグループ対話をし、15分の全体対話をする。

第2の報告を30分聴き、10分のグループ対話をし、15分の全体対話をする。

最後に、2件の報告を総括しながら15分の全体対話をする。計2時間10分の対話。

どのような報告がなされるのか、報告者のみが知っている状態で場が開く。



25人の前に立ち、あいさつをし、進行の段取りを説明し始める。

ゆったり、身振りを大きく、語りかける。

大きな段取りを語り、次に細かい段取りを語る。

細かい段取りを語りながら、参加者の表情に「説明に対する受けとめきれなさ」を感じる。

段取りが細かすぎて、窮屈に感じられているように見える。

語りながら判断し、段取りをより自由度の高いものに変更する。

テーマ「ケアと専門職の学び」を説明しない。

その場の空気とテーマの言葉に大きな乖離を感じる。

テーマに意識を向けることは、対話へ参加することの敷居を上げるかもしれないと思い何も説明せず、第1の報告者にマイクを譲る。報告が始まる。

#### A. 感覚をすりあわせるように

誰がどんな気持ちで参加しているか何もわかっていない状態で始まる。「始める」より「始まる」がふさわしく感じる。私の意図、準備にそって始めるのではない。その誘惑を恐れる。何をどのように語り始めればいいのか探りながら始まる。ひとりひとりの表情や姿勢とそれがつながりあって漂う場の空気を感じ取りながら、互いの感覚をすりあわせるように、ゆったり言葉を紡ぐ。波長をあわせ、ハーモニーが響くことをイメージしながら紡ぐ。

#### B. 身体というアンテナ

その時そこで何を感じ取れるかは感受性の問題で、その感受性は私の場合、かなりの部分を身体のあり方によっている。脱力し、肩甲骨をゆるめ、肩を落とし、足の裏の真ん中に体重をかけ、地面からの力を骨盤で受けとめて立つ。下腹部に意識を集め、体幹を引き締めて声を発する。ゆるんでしなやかに立てる時、目と耳と心が開かれて、その時そこで起きていることに静かに向きあえるのではないか。



報告が続いている。

深く聴くことはしていない。

報告の骨子を脳裏にラフに描き、骨子の中に対話の論点を探しながら聴く。

聴きながら参加者の表情を覗いていく。報告の受けとめられ具合を探りながら覗いていく。

報告する人と聴く人の間にどんな空気が生まれていくのかを感じようと努める。

参加者の表情。眉間にシワ、うなずき、メモ、微笑み、つぶやき。

個別に注目せず、全体をおおまかに見つめる。

報告後の切り出し方、発すべき言葉と発する際の態度のヒントを、場の空気の中に探る。

### C. 何かを見れば、何かが見えない

複数の人が集う場では、様々なことが様々に絡みあって同時に生じる。小さな出来事が大きな背景のもとで起きることもある。個々の出来事を全体から切り離して受けとめると、全体に流れる大きな意味を見失うのではないか。だから全体を茫洋と眺めるように向きあう。個々の出来事を見失っているのかもしれない。ビデオを覗いて初めて知った事実もある。確かに見えてはいなかったが、感じ取ってはいたような気もする。注視しなければ見えないことがある。注視するがゆえに見失うことがある。ファシリテーターとして後者を恐れる。



報告中のトラブル。

ビデオ映像の音声がでない。操作がわからない。

焦る。時間が過ぎる。参加者の沈黙が気まずい圧力に感じられる。

焦る。音が出ない。時間が過ぎる。過ぎる。

焦っている自分を感じ、自分から意識を遠ざける。

今このとき、この場の意味を感じとろうとする。

思いがけずやってきたこの空白の時間は、参加者をつなぐことができるのではないか。

言葉が生まれる。トラブルが起きていることを参加者にゆったり伝える。

ここまでの報告に含まれていた印象深いキーワードを取りあげ

それについてグループで雑談してもらおうよう伝える。場の空気がゆるむ。くすくす笑い。

スタッフに助けを求めるため会場を出る。

### D. 気まずいことは、思ったほど気まずくない

事前にどれだけ詳細に想定しても想定外のことは起きる。想定外のことが焦りを生むのは想定外であることがマイナスであるという価値判断による。出来事にマイナスもプラスもなく、ただ起きる。起きたことに対してマイナスの価値判断をせずに、そこから生み出されるプラスの可能性に目を向けたい。起きたことに可能性の目を向ければ、そうしなければ生まれなかったはずの展開が生まれるのではないか。気まずい出来事を気まずくしているのは自分の価値判断であって、出来事そのものが気まずいわけではない。

## E. 言葉が生まれる

場に自然体で向きあう時、流れが見え、展開が浮かび、言葉が生まれる。そんな言葉こそが場に響くのではないか。準備された美しい明快な言葉よりも、その時その場の意味の流れの中に自分が同化した時に生まれる言葉にこそ力が宿るのではないか。



報告が終わる。トラブルもあり予定より15分近く遅れている。  
せかさされる対話の空虚さを思い、予定通りゆったり進めることにする。

私が参加者に語る。意識してゆったりと語る。  
予定より遅れているけれど、予定通りの段取りで進める。安心した対話をしたいから。  
自分の責任で必ず最後には帳尻があうようにする。大丈夫。

くすくす笑い。反応をひろって言葉を返す。  
大丈夫だと思ったら大丈夫。大丈夫。

小さな反応、ひろい、言葉、また反応。  
ささいなやりとりが場にリズムを生む。  
段取り通り、グループ対話を始めてもらう。

グループ対話が続く。  
ぎこちない始まり方に見えたが、少しずつほぐれてくる。  
想定したほどには進ちょくしない。時間が足りないのではないかと思いは始める。

グループ対話を終えるべき時間になる。  
時間内に、グループでひとつ「全体で深めたい問い」を書き出すことになっている。  
5グループのうち1グループのみが書き始めている。  
場の空気が煮詰まっているわけではなく、生き活きとしていることを感じとる。  
時間だから早く書き出すように促すか、黙って待つか、迷う。

自分で背負い込んで判断しようとしている自分に気づく。  
先に行われたシンポジウムで登壇していたM先生が視界に入る。  
展開が浮かぶ。任せよう。

参加者の前で、私がM先生に語り、問う。  
予定時間が過ぎている。計画したことが計画通りにいっていない。  
M先生ならこういう場合どうするか。

場が和む。笑いが連鎖する。M先生が答える。  
予定通り進めるべきだと。今の雰囲気なら、みんなすぐに書けるだろう。



M先生の提案通りに進めることを全員に語り、すぐに書くように促す。

みんなの口と手が急ピッチで動き始める。

本当にみんなすぐには書けている、と状況をわかちあう。

M先生の場の読み取りに対して、「さすが」と賛辞のつぶやきが笑いととも広がる。

#### F. 物理的な時間と意味的な時間は異なる

例えば1時間に10のことをするために、ひとつに6分ずつを割り当てる予定を立てる。30分経過して3つしかできていなかったら、かなり遅れていることになる。しかしそれは物理的な時間の上で遅れているだけで、本当に遅れているかどうかは時計では計れないのではないか。そこまでの30分で何がどのように行われ受けとめられたのか、結果としてその場にどのような意味と関係が生まれたのか。それによってこそ遅れは計られるべきではないか。

ゆっくりじっくり豊かな意味が生み出され関係が育まれた場には、想定を超えたスピードで展開していく力が宿ると感じる。物理的な時間経過と意味的な時間経過は異なるのではないか。私は後者に重きを置きたい。時計に振り回されて、場に生まれる意味と関係を乱すことを恐れる。

#### G. 私にできることなど、たかが知っている

その時そこで起きていることの意味と関係を私がすべて理解できるわけではない。当たり前のことが、ファシリテーターとして前に立つと忘れ去られる。自分がなんとかせねばと思い始める。焦りと思いがりどと気負いから自由になれば、その時そこで起きていることに可能性の芽を見出している人が見えてくる。行き詰まりつつあるように見える場を面白がってもっと展開できる手が見出している人がきつといる。私がすべきは、なんとかできる糸口を見出している人を見つけて委ねることではないか。その方が思わぬ展開が生まれて、私も楽しめる。私にできることなど、たかが知っている。



グループから「全体で深めたい問い」が書き出された紙が仕上がってくる。

受け取りにグループを回る。その場で読み、意図や背景を参加者と語りあう。

紙を読み上げながら黒板に貼り出していく。

5つの問いが書き出された紙。関連性の高い問いを近くに並べて貼る。

出そろった問いに全員が目線を集める。

5つの問いの性質、関連を見出しなが読み上げていく。

言い換え、要約し、関連づける。

バラバラに出された5つの問いを、相互に関係する5つの問いに読み替える。

「いかに学びあいを継続するか」について複数のグループから問いが出されている。

注目度が高く、他の問いへの関連性が広いと判断し、最初に取り上げる。

私が報告者にコメントを求める。

継続をとりたてて意識しているわけではない、とコメントされる。

さらりとした回答に、もうすこし深く問いかけようかと思いつきながら、切り口が浮かばない。  
この問いが、学びあいの継続を意識し苦勞を重ねている人たちから出されたことが思い出される。

展開が浮かぶ。自分で問いかけることをやめる。

この問いを発したグループに、報告者のコメントを返し、さらに意見を求める。

発言が発言を呼ぶ。傍観する。

「いかに継続するか」の問いが、「若手の集団だから継続しやすいのではないか」の問いを生む。  
「ならばベテラン集団の学校では学びあいの継続は、より難しいのか」と問いを展開させる。

「ベテラン集団の方が壁が生まれやすく。広がり生まれにくい」と25年目の先生が答える。

答えが最初に出された問い「このスタイルは広がるのか」に関連していることに気づく。

「ベテラン集団にはこのスタイルは広がらないのか」と展開する。

別の人が「壁を越えるようなシステムが必要なのではないか」の問いが発せられる。

最初に出された問い「学びあいを生むための研修とは」と

いま出された「システム」についての問いが関連しているように感じる。

私が報告者に問う。どのようなシステム、研修があるか。

報告者が答える。

授業を見せあいながら、先輩から後輩へ語り伝えられていく様子が語られる。

報告者の語りから、特別なシステム、研修という意識への焦点は見えない。

相手に特定の発言を期待し始めている自分に気づく。

これ以上は進めない。展開でなく誘導になる。

答えを深く受けとめるのみで、論点を変える。

## H. 浮かび上がる展開

場に生まれる意味の流れを予断なく感じ取ることができれば、そこから次の展開が浮かび上がってくるのではないか。展開を具体的に計画することは、その場の意味の流れに対する読み取りを遮断するのではないか。その場で、その人達が、聞いたがっていること目を向けたがっていることが、自然と浮かび上がる様が見えてくるのではないか。そのような読み取りを可能にする心身のあり方を探している。

## I. 未知なるものを安易な既知にあてはめる

浮かび上がった展開に自然にそっているつもりでも、実際は自分の稚拙な論理に場を従わせていることがある。出された発言の中で、自分に理解できる明快な部分だけをつなぎあわせて展開させる暗愚に陥る。あいまいで言葉になりがたい部分にこそ発言の本質が宿ることは多い。にもかかわらず、明快な部分や、自分の意図にそった部分にだけ理解の目を向けてしまう。他者の発言の未知なる意図を、自分の論理という安易な既知にあてはめて読み取ったつもりになる。



報告にあった「人生最高の小学校6年間にする」についての問い。  
私が報告者に問う。子どもたちはいつどんな時に人生最高の6年間を感じていると思うか。

報告者が答える。  
直接子どもに聞いたことはないし、言われたこともないけれど  
今伝わらなくてもいい、いつかどこかで気づいてくれればいい。

まとめない。言葉をくりかえし場内に響かせて終わる。  
すでに予定時刻を大きく超えている。問いがひとつ残されている。  
問いについて対話する時間はない。

最後の問い。  
「授業でどのようにして聴く雰囲気を作っているのか」

報告者の声がとても小さかったにも関わらず、参加者が熱心に耳を傾けていた様子を思い出す。  
声が小さくても聴くことはある、と思う。なぜなのか、答えを出すのは自分ではない。

私が参加者に問う。  
声の小さな報告であつても熱心に耳を傾けていたのはなぜか。

問うだけで発言は求めない。ただ問う。考えてもらう。考え続けてもらう。  
この問いを頭において、次の報告者の言葉に耳を傾けようと促す。  
次の報告者が登壇する。報告が始まる。

#### J. 問いにはいつも答えが必要なわけではない

問われれば答えたくなる。語り尽くしたくなる。しかし、問いの意味を深く感じ取るにとどめて  
答えを求めず語り尽くさない方が気づきが深まることのあるのではないか。拙速な答えより、問い  
がもたらす間（ま）、余韻、空白にこそ、ひとりひとりに考える力を与えるのではないか。答えを  
語りたがる誘惑を恐れる。



第2の報告を聴く。  
第1の報告との対照的な内容に気づく。  
教師の学びあいを継続することを意図したサイクルについての報告が続く。  
第1の報告では「継続への意図」は見出せなかった。  
グループ対話の前に、内容の違いに焦点を当てようと考え始める。

報告が終わる。  
私が参加者に語る。  
第1の報告よりも、サイクルが強調されていたように感じる。  
ふたつを比べながらグループの対話を進めるよう促す。

グループ対話が始まる。  
 慣れた様子がかがえる。  
 意見のやりとりが噛み合っているように見える。  
 「深めたい問い」を書き出すのに時間はかからない感触を持つ。

問いを書いた紙の提出を促す前に、ひとつのグループから提出される。  
 問いの意図を確認しながら受け取る。黒板に貼り出す。  
 他のグループにもやんわり促す。急がせないように。

対話が収束に向かっているのを感じる。  
 提出を促す言葉をできるだけ少なく発しようとタイミングを計る。  
 会場の言葉の波が鎮まるのを待つ。

#### K. 言葉の波が寄せては引いていく

大きな声だから届くわけではない。喧噪に向かって大声を張り上げても喧噪に輪がかかるだけだろう。小さな声なら耳を集めるわけでもない。喧噪に呑み込まれるだけかもしれない。場に向きあっていると、たくさんの言葉が波のように寄せては引いていくのを感じる。どんなに騒がしくても、言葉の波が引いていく瞬間が繰り返しやってくる。そんな時に声を発すると届くように思う。どうしても聴いて欲しいという切実さでもって語るのではなく、波のリズムにあわせるようにゆったりと声を発する方がよいのではないか。ゆるんで自然にその場に向きあう心身から発せられる声なら届くように感じる。



3分野にわたる問いが出される。  
 3つにわけて読み上げ紹介していく。  
 問いがこの場に与える意味、問い同士の関係が浮かんでいく。

ひとつめ。  
 バズセッションって何？

報告の中で使われた言葉の意味に対する素朴な質問。  
 言葉の意味の解説だけで終わらせるなら扱う価値が低くなってしまふ。  
 意味だけでなく目的の解説まですれば、この場のあり方の説明に結びつくことに気づく。  
 この場がまさにバズセッション的であることをわかちあおうと思う。

ふたつめ。  
 聴きたくなる伝えたい、生徒が食いついてくる必要性のある課題づくりはどうすればいい？  
 子どもたちに必要感があれば自分で見つけられるんじゃないのか？  
 必要性を感じない子どももいるのではないか？その子たちはどう学べばいいか？

論点が対立していることに気づく。

必要性のある課題づくりは、教師の責任か、子どもに任せていいのか？

この対立を明示しようと思う。

みつつめ。

完成されたサイクルがあるということは定型化していくのではないか？

どうやってそれを打ち破って活性化を図っていくのか？

学びあいの継続が問われた前半の対話との関連の深さを感じ取る。

第1の報告では「学びあう学校」が語られた。

その後の対話では「学びあいをいかに継続するか」が問われ、「継続は意図しない」と回答された。

第2の報告では「継続のためのサイクル」が語られた。

その後の対話では「サイクルは定型化してしまう（マンネリ化する）のではないか」が問われた。

ふたつの報告のふたつの論点が、ひとつの論点としてつながり重なりあっていくのを予感する。

#### L. 意見はつながりたがる

大きなテーマ、話題、問題意識を共有している限り、そこで出される多様な意見はバラバラではなくつながりたがる性質を持つのではないか。一見バラバラに見えても、それが語られる背景を感じ取ると、大きな全体を構成する一部として関係を持っているのが見えてくる。多様な意見が、大きな全体の中へと位置づけられる時、より深い対話へと進むことができるのではないか。赤の他人だと思っていた人が、同郷だったり共通の知人がいることがわかったりすると、とたんに話が弾むのと似ている。人も意見もつながりを求めている。意見が人から発せられるのだから当然かもしれない。

#### M. 個が全体を組み替え、全体が個を位置づける

次々と出される問い、意見、移り変わる論点など、場の流れを感じるに任せていると、脳裏に対話の全体構造のようなものが図として浮かび上がる。似た意見がつながり重なりあい、問いの中に丸や四角で囲われ、関係の矢印が一方から他方へと伸びていく。相関、因果、包含、様々な関係が形で浮かび上がる。新たな意見や問いが投げ込まれるたびに、全体構造は更新されていく。更新された全体構造の中でそれぞれの意見が意味とつながりを持っていく。個が全体を組み替え、全体が個を位置づけていく。個を注視しすぎず、茫洋と場の意味を感じ、論理で整理し、全体構造を直観で描き出すような思考があるのではないか。



素朴な質問から扱うことにする。

バズセッションについて私が報告者に問う。

報告者が答える。バズセッションとは、自分の実践を書き、読みあい、語りあう場。

報告者の学校におけるバズセッションの意味を答えられた。一般化する必要を感じる。

バズの一般的な目的、意味を補足する。

このセッションの前に行われたセッション2にもバズが含まれていたこと  
このセッションもバズの応用であることを説明する。

ふたつめの問いに移る。

必要性、絞り込みは教師の責任か、子どもに任せればいいのか。  
教師の責任だとすれば、どうすればいいのか。

報告者が答える。

生徒に失敗させる。不満足な状態にさせる。  
そこで「できなかった！もっと知りたい！」という思いが生まれる。

必要感、満足な状態でなく、不十分な状態で与えてみることから生まれる。  
足りないから埋めたいという思いが自然にわいてくるのではないか。

私がこの問いを出したグループに問う。  
この答えに納得するか。

グループの人が答える。

視点や分野を絞りこむことで、どうやってひとりひとりの学びに返していくのか。  
「青虫やキャベツ」に興味のある子どもは、「さなぎ」について必要感を持つのか。  
絞り込んだら、生徒に必要感はないのではないか。

報告者が答える。

青虫とさなぎでは、話はつながらないけれど、学習のスタイルを学ぶことができる。  
自分の興味とは関係のないことでも、考え方を学ぶことができるのではないか。

うまく伝わらない。

報告者が、自身の回答の脈絡を見失ったことを照れながら開示する。  
自分が何をしゃべってるのかわからなくなりました。

会場が笑いに包まれる。

一生懸命に答えながら脈絡を見失い、その内面を自己開示し、笑いが引き起こされた。  
脈絡を失った話であっても、語り手の熱意を感じて誰もが真剣に耳を傾けていた。  
その状況の面白さを深くわかちあいたいと思う。

私が参加者に軽く投げかける。

今はどういう瞬間だったんだろう。

本来の論点に発言が続きそうなので深追いはしない。投げかけるだけにとどめる。

報告者が、報告者の同僚の補足も得ながら答える。

周りの子が別の視点で追求しているので、知識が広がっていく。  
個ではなしえない学びがある。学び方を学んでいくのではないか。

報告者の答えを聴きながら、ここまでの流れの意味が浮かぶ。  
この対話の状況そのものが、視点の絞り込みであることに気づく。

私が参加者に、この状況の意味を問う。  
この状況がまさに課題の絞り込みによって学びをもたらそうとしていることを語る。

私が参加者に語り、問いかける。  
私は今、5つの問いのうち3つに絞り込んで投げかけている。  
この問いを出さなかったグループには、この問いへの必要感がないことになる。  
しかし、この問いを出さなかった2つのグループは何も学ばないだろうか。  
「何を話してるかわからなくなりました」と言いながらも一生懸命に答えようとしている報告者を見て、何も感じないだろうか。何も学ばないだろうか。

問いを投げかけるだけにとどめる。  
発言は求めない。考えてもらう。

#### N. 私たちが置かれた状況を感じる

自分が置かれた状況を感じ取って開示することは人の距離を近づける。意見が対立したり答えが見えなくなった時、そのこの集う全員がどのような状況に置かれているのか相対化を促すことで、ともに考える道が生まれるのではないか。私とあなたと彼と彼女は、意見は違っても同じ大地に立っていることを感じ取ること、それが対話のよって立つ基盤ではないか。どんなに手詰まりな状況であっても、少なくとも言えることは、そこにいる全員がその状況を共有しているということ。その気づきから何かが開けるのではないか。

#### O. 不確実な状況を泳ぐように楽しむ

脱線、混線しながら次々と展開していく場を取束へと向かわせたい誘惑がある。しかし、対話の場には、特定の方向へ力で引っ張ると硬直し、身をゆだねて泳ぐように楽しむと豊かな方向に自然と向かっていく性質があるのではないか。結論やまとめへと向かわせたい誘惑、不確実な展開を確実な取束へと向かわせたい誘惑を恐れる。不確実を楽しむ人の中からこそ豊かな展開が生まれるのではないか。



最後の問いに移る。私が報告者に問う。  
完成されたサイクルの中で活動していく時  
定例化してつまらないものにするか、活性化していくか  
その分かれ道はどこにあるか。

報告者が答える。  
マンネリを避けて活性化していくためにたくさんの人に見てもらう。  
全国の先生に見てもらう。アドバイスしてもらう。

研究集会で、外に対して大きく見せる場が刺激になっていると思う。

報告者の答えを聴きながら、第1の報告者に新たな視点をもたらしたかもしれないと思う。再度、私が第1の報告者に問う。学びあいの持続について、どんな問題意識、課題があるか。

第1の報告者が、「前にも話しましたが。。。」と戸惑いながら答える。持続させるという意識がないこと、各自に任されていること、自立してやっていること。

私が設定した論点「学びあいの継続はいかに可能か」が空振りに終わったことを感じる。継続について対照的な2つの報告があったにもかかわらず論点についての意識が噛み合ず対話がすれちがっていたことを思う。

セッションの終了時刻になる。ここまでの対話、すれちがった対話にどのような意味があったのかと自問する。

ここまでの対話で出されたふたつの言葉が思い浮かぶ。「意味は後になってわかればいい」と「不完全な状況」。ふたつが結びつく。

私が参加者に問いかける。言葉が浮かぶままに語る。

2校のすれ違いっぷりは興味深い。なぜこんなに違うのかはわからない。なんでこんなに違うんだろうか、不完全な状態で与えられるとき私たちは今日をきっかけとして学び始めるのではないか。後でふりかえったとき、今日この2時間をきっかけとして新たに学び始めたな、と思えたらいい。人生最高の6年間も死ぬ間際にわかるかもしれない。今日の意味も、きっと後でわかる。

言葉が届く間をおいたのち  
場を閉じる。

#### P. 無意味であることの方が難しい

真摯に向きあう限り、どれだけすれ違おうと空回りしよう、無意味な対話はありませんか。人が人と共通の関心を介して真摯に向きあう時、その時間が無意味であることの方が難しい。答えが見出せず不毛に思えたとしたら、その時間の意味の流れを深いところでとらえ損ねているのではないか。それは直接的な解答として浮かぶよりもむしろ、これからの歩みを支える問いとして浮かぶのかもしれない。わかりやすい解答として話をまとめて綺麗に場を閉じることへの誘惑を恐れる。

#### Q. 全体が一挙に与えられる

細部を分析的にふりかえるのではなく、時系列にそってふりかえるのでもなく、ここまでに起きたことを同じ平面上に並べ、少し離れてそれを眺めるようにふりかえる時、対話の意味の全体が一挙に与えられるように感じている。部分としての論点や言葉の集合体としての全体ではなく、もっ



と印象的で感覚的なものが与えられる。それをすくいとるには、すくいとろうという意図が邪魔するように感じている。意図なくふりかえる時に与えられることがあるのではないか。

### 3. ひとつの現実のようなもの／誘惑

この日この場所で、本当に起きたこととは何だったのだろうか。

私とその一部だった対話の場を録画したビデオを観ながらこの文章を書いた。その日その場所では見えておらず、ビデオを観ることで初めて見えてきたことも確かにある。私がそこで向きあっていた現実、私がそこで感じていたようでは必ずしもなかったのだろう。

ビデオに記録された映像こそが本当に起きていたことだろうか。しかし、ビデオに何が写っているのかを判断するのは私であり、または他の誰かだ。私であれ他の誰かであれ、人が観て初めてビデオの記録は現実となる。

私に見えたことと、参加者ひとりひとりに見えたことを全部たしあわせれば本当に起きていたことを明らかにできるのだろうか。もしそうなら、本当に起きていたことは誰にもわかりえない。

自分が見えていたことを言葉にすることすら困難なのにひとりひとりに見えていたことを総合してひとつの現実を浮かび上がらせることは、できない。

確からしいことは言っても確かなことは言えない。そのようであったかもしれないし、そのようでなかったかもしれない。現実とはいつも、そのように不完全な状態でしか与えられない。

起きたこと、起きて欲しいこと、起きて欲しくないこと  
いくつもの思いが浸食しあってひとつの現実のようなものを私の目に見せる。  
いつもどこかが偏り、何かが欠落し、何かが過剰にある。

対話とは、そしてそれを喚起するファシリテーションとは、どこまでいっても定まることのない不完全な現実の中で少しでも確かなものをすくいとる試みではないか。それでいて何より恐れなければならないのは、結論として現実を確定させたがる誘惑かもしれない。

確かさを求めなければ、不確かなままで良いと甘え、何もすくいとれない。  
不確かさを恐れれば、拙速な確かさに甘え、つまらないものしかすくいとれない。  
確かさと不確かさのあいだを行き来し続ける覚悟を決める時、対話は深まっていくのではないか。



ファッションの背後にある感覚をすくいとろうと試みながら  
泳ぎ回る金魚を一枚の絵に写しとるような困難さを感じてきた。

あいまいでうつろいゆく「のようなもの」としか言いようのない感覚を「である」として固定する時  
それが予断となって作用し、後につづく行為を貧しくするのではないかと恐れた。

「である」という糸で紡がれた布はいつも  
「かもしれない」へとほころびていくことを受け入れねばならないのではないか。

行為を縛りつける丈夫な布ではなく、行為に寄り添うしなやかな布を求める。  
それはもしかしたら、何もまもっていないかのような不安、そこまでいかなくとも  
破れた布をまもっているかのような不安とともにあることかもしれない。

しかし、その不安こそが行為を豊かにしていく力を与えるのではないだろうか。

## 結語. 不完全な文章が残される

私は何かをすくいとっただろうか。  
何匹かの金魚をすくいとっただろうか。  
すぐに紙を破ってしまう下手な金魚すくいだったろうか。

もしかしたら何かをすくいとっているつもりで  
すくいとるための道具、私の現実のとらえ方と向きあっていたのかもしれない。  
「すくいとる」ことは、「何を（対象）」と向きあう以上に  
「どうやって（とらえ方）」と向きあうことなのだろうか。

金魚すくいは、金魚を見つめなければできない。  
私は対話における金魚だけを見つめてきたのかもしれない。

金魚は水の中でこそ泳ぎ回る。  
水は水槽があるからこそ保たれる。  
対話における水とは水槽とは何を意味するのか。

私はこの試みの中で、何かを見つめるがゆえに何かを見失っている。  
見失うことは見つめることの代償だからだ。  
私は何を見失っただろうか。

今はただ、不完全な文章が残されたにすぎない。  
問いから生まれた新たな問い。姿を変えた問い。

意味はいつも、不完全な形で与えられる。

もしかしたら時の流れの中でより明らかな意味が与えられるかもしれない。

「である」と「かもしれない」をめぐりながら、私の金魚すくい「のような」試みが続く。

このささやかな試みの末に確かに与えられたのは

安易な完全に逃げず、不完全に甘えず、そこに宿る豊かさを問い続ける力である。

了